

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	北海道財務局長
【提出日】	平成27年6月26日
【事業年度】	第74期（自平成26年4月1日至平成27年3月31日）
【会社名】	札幌テレビ放送株式会社
【英訳名】	The Sapporo Television Broadcasting Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役会長兼社長 島田 洋一
【本店の所在の場所】	札幌市中央区北1条西8丁目1番地1
【電話番号】	011(241)1181
【事務連絡者氏名】	経理局経理部長 野口 毅
【最寄りの連絡場所】	札幌市中央区北1条西8丁目1番地1
【電話番号】	011(241)1181
【事務連絡者氏名】	経理局経理部長 野口 毅
【縦覧に供する場所】	札幌テレビ放送株式会社東京支社 (東京都中央区銀座5丁目15番8号時事通信ビル13階)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第70期	第71期	第72期	第73期	第74期
決算年月	平成23年3月	平成24年3月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月
売上高 (百万円)	21,426	21,237	21,126	21,554	19,781
経常利益 (百万円)	1,239	1,542	1,388	1,112	1,143
当期純利益 (百万円)	597	1,067	812	692	588
包括利益 (百万円)	545	1,176	1,305	1,079	1,518
純資産額 (百万円)	24,531	25,687	26,815	27,020	28,167
総資産額 (百万円)	31,489	33,080	33,993	36,277	36,934
1株当たり純資産額 (円)	16,247.37	17,014.14	8,885,827.64	9,719,211.63	10,347,939.61
1株当たり当期純利益金額 (円)	405.26	711.34	270,844.15	235,536.92	214,518.82
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	77.37	77.14	78.41	74.08	76.26
自己資本利益率 (%)	2.48	4.28	3.11	2.58	2.14
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	2,393	2,425	2,597	2,110	2,222
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	1,680	95	1,228	5,440	2,255
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	770	49	837	1,189	702
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	7,302	9,643	10,175	8,034	7,299
従業員数 (人)	616	637	630	622	394
(外、平均臨時雇用者数)	(141)	(141)	(126)	(131)	(144)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、新株引受権付社債等潜在株式がないため記載していない。

3. 株価収益率は、非上場のため記載していない。

4. 当社は平成25年10月1日付を効力発生日として、500株を1株とする株式併合を実施しているが、第72期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益額を算出している。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第70期	第71期	第72期	第73期	第74期
決算年月	平成23年 3月	平成24年 3月	平成25年 3月	平成26年 3月	平成27年 3月
売上高 (百万円)	14,867	14,641	14,823	15,098	15,568
経常利益 (百万円)	922	991	948	885	1,158
当期純利益 (百万円)	426	710	586	618	1,205
資本金 (百万円)	750	750	750	750	750
発行済株式総数 (千株)	1,500	1,500	3	3	3
純資産額 (百万円)	20,303	21,025	21,934	22,343	24,046
総資産額 (百万円)	24,702	25,080	26,126	26,196	28,313
1株当たり純資産額 (円)	13,536.63	14,018.23	7,312,241.41	8,080,742.23	8,833,845.93
1株当たり配当額 (円)	60	118	97	54,562	110,629
(うち1株当たり中間配当額)	(30)	(30)	(30)	(15,000)	(15,000)
1株当たり当期純利益金額 (円)	284.25	473.11	195,207.03	210,289.40	439,153.82
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	82.19	83.83	83.95	85.29	84.93
自己資本利益率 (%)	2.12	3.43	2.73	2.79	5.19
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	-
配当性向 (%)	21.11	24.94	24.85	25.00	25.00
従業員数 (人)	216	201	198	198	194
(外、平均臨時雇用者数)	(98)	(107)	(86)	(74)	(103)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、新株引受権付社債等潜在株式がないため記載していない。

3. 株価収益率は、非上場のため記載していない。

4. 当社は平成25年10月1日付を効力発生日として、500株を1株とする株式併合を実施しているが、第72期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益額を算出している。

2【沿革】

昭和32年春、札幌地区にテレビ放送局を開設すべく札幌テレビ、テレビ北海道、北海テレビジョン、日本テレビ放送網の4社が競って免許申請を行った。当時全国的に言論報道機関の独占排除の声が高まり、北海道においても民放の独占のあり方に強い批判が起きはじめていたが、この免許申請に対し4社が統合することを条件に、昭和32年10月22日、札幌テレビ放送にテレビ放送の予備免許が与えられた。当社は資本の調達や会社設立準備に約半年をついやし、昭和33年4月8日資本金5億円、授權資本10億円の会社設立に至った。その後の主な変遷については次のとおりである。

昭和33年9月	東京支社開設
昭和33年10月	大阪支社開設
昭和34年4月	テレビ放送開始（札幌テレビ放送局開局）
昭和34年12月	旭川テレビ放送局開局
昭和35年5月	増資（資本金7億5千万円）
昭和35年6月	室蘭テレビ放送局開局
昭和36年12月	函館テレビ放送局開局
昭和37年8月	釧路テレビ放送局開局
昭和37年12月	ラジオ放送開始（札幌ラジオ放送局開局）
昭和38年4月	不動産関連事業を営む会社としてエス・テー・ビー不動産株式会社（現・エス・テー・ビー興発株式会社）設立
昭和38年7月	帯広テレビ放送局開局
昭和39年3月	旭川、函館、帯広ラジオ放送局開局
昭和39年6月	北見、網走テレビ放送局開局
昭和43年5月	テレビカラー放送開始
昭和43年6月	テレビ放送APMによる自動送出開始
昭和44年1月	札幌テレビ放送局手稲山送信所運用開始
昭和46年2月	札幌中央区北1条西8丁目現放送会館に本社移転
昭和46年9月	音楽出版関連の会社として株式会社エス・テー・ビー・バック（平成15年商号変更 株式会社S T Vメディアフィールズ21）設立
昭和48年6月	情報処理会社として北星情報処理開発株式会社（現・株式会社エイチ・アイ・ディ）設立
昭和50年12月	テレビ番組制作会社として株式会社札幌映像プロダクション設立
昭和51年11月	室蘭、釧路、名寄、北見、網走ラジオ放送局開局
昭和54年7月	テレビ音声多重放送開始
昭和57年1月	通信販売を行う会社として株式会社エス・テー・ビー開発センター設立
昭和62年3月	ラジオ営業オンラインシステム運用開始
平成元年7月	業務用移動体無線通信事業を営む会社としてエステービー・メディアセンター株式会社設立
平成2年10月	函館放送局新局舎建設
平成6年3月	釧路放送局新局舎建設
平成6年8月	別館アネックス建設
平成8年1月	旭川放送局新局舎建設
平成8年2月	テレビ番組企画制作会社として株式会社オフィス・サッポロ設立
平成12年4月	多目的イベントホール札幌メディアパーク・スピカ建設
平成14年2月	連結子会社北星タクシー株式会社及び子会社北星興産株式会社を売却
平成17年7月	ラジオ放送事業会社として株式会社S T Vラジオ設立、ラジオ放送免許を承継（平成17年10月営業開始）
平成18年2月	札幌テレビ放送局手稲山地上デジタル送信所運用開始
平成18年3月	ニュース情報センター完成
平成18年6月	道央圏で地上デジタル放送（テレビ）開始
平成19年10月	道内基幹地区（旭川・函館・帯広・釧路・網走・室蘭）6局で地上デジタル放送（テレビ）開始
平成20年3月	札幌メディアパーク・スピカ閉館
平成21年10月	株式会社エス・テー・ビー開発センターが、株式会社S T Vメディアフィールズ21を吸収合併
平成23年7月	アナログ放送終了、デジタル放送完全移行
平成24年7月	株式会社札幌映像プロダクションが、株式会社オフィス・サッポロを吸収合併
平成26年9月	連結子会社株式会社エイチ・アイ・ディを売却

3【事業の内容】

当社及び当社のその他の関係会社である日本テレビ放送網株式会社は、それぞれに子会社・関連会社から構成される企業集団を有し広範囲に事業を行っている。このうち、当社グループは、当社、子会社10社及び関連会社1社で構成され、放送、不動産、映画制作、通信販売及び音楽出版を主な事業内容とし、更に各事業に関連するサービス等の事業活動を展開している。

各事業における当社グループ各社の位置付け等は、次のとおりである。

放送事業部門.....当社が主として放送法に定めるテレビジョン放送を行っている。子会社株式会社STVラジオは、主として放送法に定めるラジオ放送を行っている。

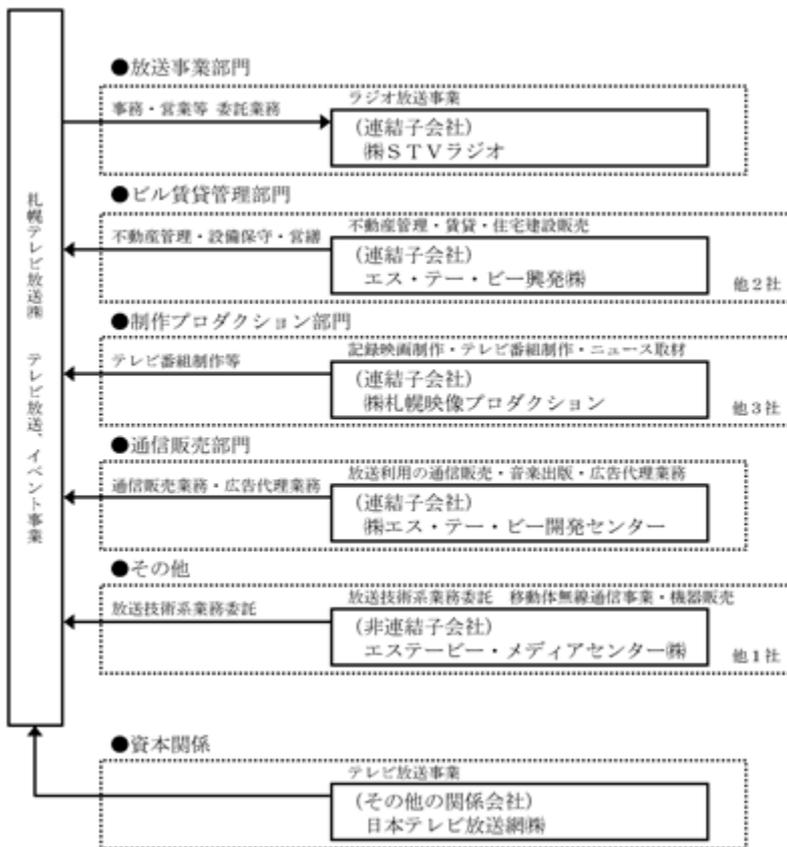
ビル賃貸管理部門.....子会社エス・テー・ビー興発株式会社は、主として不動産賃貸、住宅の建設販売等を行っているが、当社所有建物の維持管理業務もを行っている。(他2社)

制作プロダクション部門...子会社株式会社札幌映像プロダクションは、主として記録映画制作、テレビ番組・コマーシャル制作、ニュース取材等を行っているが、テレビ番組・コマーシャル制作、ニュース取材等を当社から受注している。(他3社)

通信販売部門...子会社株式会社エス・テー・ビー開発センターは、主としてテレビ・ラジオ利用の通信販売関連業務、音楽出版、広告代理店業務を行っている。

その他...子会社エス・テー・ビー・メディアセンター株式会社は、業務用移動体無線通信事業及びそれに係る機器販売のほか、当社の技術系業務委託を受注している。(他1社)

事業の系統図は次のとおりである。



当連結会計期間における、各区分に係る主な事業内容の変更と主要な関係会社の異動は次のとおりである。

(情報処理部門)

当社子会社の株式会社エイチ・アイ・ディの保有株式のすべてを、平成26年9月19日付で売却したことに伴い、連結の範囲から除外し、情報処理部門から撤退している。なお、売却時点までの損益計算書のみ連結している。

4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の所有 (被所有)割合 (%)		関係内容
				所有 割合	被所有 割合	
(連結子会社) エス・テー・ビー興発(株) (1)(2)	札幌市中央区	250	ビル賃貸管理部門	100.0	-	当社所有の建物の管理・営繕を行っている。 役員の兼任：1名
(株)札幌映像プロダクション (1)	札幌市中央区	30	制作プロダクション部門	100.0	-	当社のテレビ番組制作ニュース取材等を行っている。 役員の兼任：2名
(株)エス・テー・ビー開発センター(1)	札幌市中央区	10	通信販売部門	100.0	-	当社のテレビショッピング事業関連業務を受託している。 役員の兼任：2名
(株)STVラジオ (1)(2)	札幌市中央区	410	放送事業部門	100.0	-	当社のラジオ放送免許を承継しラジオ放送事業を行っている。 役員の兼任：1名
(その他の関係会社) 日本テレビ放送網(株)	東京都港区	6,000	テレビ放送事業	-	27.3	当社の大株主である。 役員の兼任：1名

(注) (1) 「主要な事業の内容」欄にはセグメントの名称を記載している。

(2) 特定子会社に該当する。

(3) 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数である。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成27年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
放送事業部門	217(111)
ビル賃貸管理部門	32(31)
制作プロダクション部門	123(2)
通信販売部門	19(0)
合計	394(144)

(注)1 従業員数は就業人員(当社グループからグループ外への出向者を除く)であり、臨時雇用者数(契約社員、派遣社員、フルタイムアルバイト等)は年間の平均人員を()外数で記載している。

(注)2 従業員数が前事業年度末に比べ減少したのは、当社子会社の株式会社エイチ・アイ・ディの保有株式のすべてを、平成26年9月19日付で売却したことに伴い、情報処理部門を連結の範囲から除外したことによるものである(前事業年度 情報処理部門 就業人員228名、臨時雇用者数28名)。

(2) 提出会社の状況

平成27年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
194(103)	43.9	19.4	11,223

セグメントの名称	従業員数(人)
放送事業部門	194(103)
合計	194(103)

(注)1 従業員数は就業人員(当社グループからグループ外への出向者を除く)であり、臨時雇用者数(契約社員、派遣社員、フルタイムのアルバイト等)は年間の平均人員を()外数で記載している。

(注)2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでいる。

(注)3 提出会社の従業員はすべて放送事業部門に所属している。

第2【事業の状況】

1【業績等の概要】

(1)業績

当連結会計年度の日本経済は、4月の消費税率引き上げに伴う駆け込み需要の反動の影響がみられたものの、企業収益の改善を背景とした設備投資、経済対策による公共事業が増加し、雇用の改善も進んだことから、景気は緩やかな回復基調が持続した。円安、株高等もあって製造業を中心に企業業績は高水準となり、当地区への広告投下も前年を上回り、下落傾向に歯止めがかかった。

このような環境のもと、当社グループの売上高は子会社の連結除外により197億81百万円と前年同期と比べ17億73百万円（8.2%）の減収となったが、営業利益は10億11百万円と前年同期と比べ38百万円（3.9%）の増益、経常利益は11億43百万円と前年同期と比べ32百万円（2.9%）の増益となった。一方、当期純利益は5億88百万円で前年同期より1億3百万円（14.9%）の減収となった。セグメント別の業績は次のとおりである。

放送事業部門

テレビ部門は平成26年度の視聴率の「全日」「ゴールデン」「プライム」の3部門で7年連続の3冠を達成した。「全日」は1992年以来、23年連続でトップとなり、全民放最長記録を更新した。3冠獲得の背景としては「どさんこワイド!!朝!」、「どさんこワイド179」を中心とした自社制作番組が好調に推移したほか、「ゴールデン」「プライム」でも日本テレビのレギュラー番組が堅調に推移した。一方、「どさんこワイド179」内で北海道の未来を創る人々を取り上げた「みる・みる・みらい企画」が平成26年の日本民間放送連盟賞「青少年向け番組」で優秀賞を受賞するなど、エリアとしっかりと向き合う姿勢と、その取り組みが評価を受けた。営業面ではスポットセールスが4月に消費増税の反動減があったものの、その後は堅調に推移し前年同期比で103%の増収を確保した。事業収入は「藤城清治の世界展」、「篠山紀信展」、「ミュシャ展」の3大美術展に多くの集客があり、前年同期と比べ2億23百万円（33.0%）の増収となった。コンテンツ収入は主力のショッピング事業が増税による買い控えを克服することができず、前年同期比で5.5%の減収となったが、自社制作番組を活かしたDVD販売と番組販売は好調に推移した。ラジオ部門ではエリアリスナー、スポンサーニーズに応える放送事業活動を展開し、売上高は15億60百万円（前年同期比 1.0%）を確保したが、事業費及び番組制作費が増加したため、営業利益は前年同期と比べ36百万円（28.7%）の減益となった。

放送事業全体における当連結会計期間の売上高は167億95百万円で、前年同期と比べ4億43百万円（2.7%）の増収となった。また、セグメント利益は前年同期と比べ2億40百万円（29.1%）増加して10億67百万円となり、増収増益となった。

ビル賃貸管理部門

中核を占めるビル賃貸部門は前期取得した「時計台通ビル」の賃貸収入約1億29百万円が増収となり売上に貢献したが、札幌丸井三越と昨年9月に契約が終了した「中央ビル」は耐震補強など改修工事のため半年間は収入がなく、ビル賃貸部門としての売上は前年同期比97.1%となった。保険サービス部門は既存企業への総合販売と新規企業開拓が奏功し、前年比114.2%の増収となった。部門全体の売上は前年同期と比べ3.9%増加し17億3百万円となったが、「中央ビル」の改修工事費用、人件費などの増加により営業利益は大幅な減益となった。セグメント利益は1億29百万円（前期比64.2%）。

制作プロダクション部門

制作プロダクション部門は、朝夕の「どさんこワイド」をはじめとするSTVの各番組で取材制作を担ったほか、撮影・編集もニュース、制作・情報番組、コンテンツと幅広く対応し、STVの放送事業活動を支えた。一般外部では、「アイヌ生活文化再現マニュアル・踊り」などアイヌ文化振興・研究推進機構からの受注を継続したほか、系列局による番組取材が通年で好調に推移した。また初めてとなる4K対応番組「マルチヘリで巡る厳冬の北海道」を制作するなど、外部案件の取り込みによる増収に向けて新たな取り組みを推進した。この結果、部門売上は12億71百万円と前年同期と比べ34百万円の増収となった。売上増に伴い制作経費や人件費の増加があったが、番組制作での直接費の縮減などに努め、セグメント利益は前年同期と比べ7百万円（74.5%）増益の17百万円となった。

情報処理部門

基幹事業の自治体事業は振るわなかったものの医療部門の機器販売や東京の金融部門の好調により、システム統括本部全体は前年同期比1億2百万円の増収となった。一方、組込事業は主力の携帯基地局関連の発注の大幅な遅れなどから前年同期比2億31百万円の大減収となったことで、売上高は前年同期と比べ1億29百万円減の14億53百万円、1億91百万円の営業損失となった。なお、当社グループは平成26年9月19日、当該事業を営む(株)エイチ・アイ・ディの全株式を売却し、同社は連結決算の対象外となったため、上記の分析は前年同期との比較で行っている。

通販販売部門

通販事業は、道内外の商談にも積極的に取り組み、定番商品に加え新規商品、取引先の拡充に取り組んだが、消費増税の影響などから低調に推移した。テレビ通販はレギュラーの「Sチョイス」と「情熱市場」で売上が低迷し、特番も目論見通りの成果を生むことができなかった。またラジオ通販も番組編成上の理由で放送時間が移行したことから定着に時間を要した。一方、カタログ通販はページ数、発行数の拡充が奏功し前年比141.7%となった。広告事業はラジオ生CMの発注減により前年比68.8%、楽曲の著作権を主とするコンテンツ事業は前年比96.2%にとどまった。部門全体の売上高は8億87百万円で前年同期に比べ1億4百万円（10.5%）の減収となり、セグメントの営業損失は11百万円の営業損失となった。

(2)キャッシュ・フロー

当連結会計年度における連結ベースの現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、前連結会計年度末に比べ7億35百万円減少し、72億99百万円となった。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における営業活動による資金の増加は22億22百万円となった。これは主に税金等調整前当期純利益や放送事業で取得したデジタル放送設備の減価償却費などによるものである。前連結会計年度に比べ1億12百万円の増加となった。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における投資活動による資金の減少は22億55百万円となった。定期預金の預入と有形固定資産、投資有価証券の取得による支出が大きく、一方では投資有価証券の償還・売却、子会社株式の売却等による収入があった。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における財務活動による資金は短期ならびに長期借入金の返済による支出、自己株式の取得による支出等により7億2百万円の減少となった。前連結会計年度と比べ18億91百万円の減少である。

2【生産、受注及び販売の状況】

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりである。

販売実績

セグメントの名称	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)	前年同期比(%)
放送事業部門	16,697	103.2
ビル賃貸管理部門	1,486	106.4
制作プロダクション部門	120	112.7
情報処理部門	1,375	36.8
通信販売部門	103	80.1
合計(百万円)	19,781	91.8

- (注) 1. セグメント間の取引については相殺消去している。
 2. 上記の金額には、消費税等は含まれていない。
 3. 当連結会計年度における主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりである。

相手先	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)		当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)	
	金額(百万円)	割合(%)	金額(百万円)	割合(%)
(株)電通	2,954	13.7	3,034	15.3
(株)博報堂DYメディアパートナーズ	2,268	10.5	2,421	12.2

3【対処すべき課題】

(1) 当社の課題と対処方針

当社はエリアでナンバー1の放送局であり続けることを経営ビジョンとする平成27年度から3か年の中期経営計画を策定した。ビジョンの達成に向けては視聴率でトップを維持することが不可欠である。このため当エリアでもっとも信頼される放送局をめざして、朝夕の「どさんこワイド」をはじめとする自社制作番組のさらなる充実を図り、制作力の強化に取り組む。また、自社番組を活用したDVDなどコンテンツ収入の拡充と新規開発を推進する。当社の成長を続けるためには地域の活性化が不可欠であり、放送、事業活動を通して国内外にエリアの情報を発信し、その発展に寄与する。一方、地上デジタル放送のスタート時に導入した放送設備は大規模な更新を控えており、利益率を向上させることが課題である。

(2) グループ各社の課題

放送事業のラジオ部門では聴取率でトップの座を獲得、維持できるよう制作力の強化とスポンサー、リスナーのニーズに応える番組開発が不可欠である。同時に財務内容の一層の強化を課題とする。ビル賃貸部門では既存ビルの稼働率を高いレベルで維持することが重要である。また部門別収支の黒字化を最優先課題として、不採算部門の解消に努める。制作プロダクション部門では「人への投資」を最優先として引き続き人材の育成と制作力強化を推進し、グループ全体のソフト戦略を支えとともに外部ビジネスの獲得に取り組む。通信販売部門ではテレビ通販の売上拡大が最大の課題となる。その他に商品量と取引先の拡充、受注体制の強化などに取り組む必要がある。

4【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある主な事項として以下のようなものがある。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

(1) 景気・広告市況の変動

当社グループで収入の柱となる放送収入は、かつてのリーマンショックや、東日本大震災など大規模災害の際に見られたような、全国的な経済環境の急変や生産活動の停滞等によって、広告市況がダイレクトに影響を受け、想定外の減収が発生するリスクがある。

(2) 他メディアとの競合

情報入手端末の多様化、録画機の高機能化、ライフスタイルの変化等により、テレビの視聴習慣が変化することによってメディアの競争激化及び構造変化が進み、テレビ媒体の優位性に影響を与える可能性がある。

(3) 視聴率の低下のリスク

放送事業にとって質のよい放送コンテンツの提供を続け、エリアの支持を得ることが重要であるが、その評価の指標として視聴率や聴取率がある。自社制作番組やキー局の番組編成の変化等により視聴率等が下がることは、地域からの評価の低下を意味すると同時に、収入にも直接的な影響を与え、当社グループの企業価値の低下につながる。

(4) 大規模災害の発生による放送設備の毀損

放送事業は設備産業であり、放送関連施設が災害等で被害を受けると正常な放送活動ができなくなるリスクがあり、情報というライフラインを守るためにも緊急時を想定した対策、放送設備のカバー体制の構築は重要な課題である。

(5) 有価証券や保有資産の減損

債券や株式市況の下落や投資先の企業の業績変動により、当社グループが保有する有価証券などの評価が大幅に下落し、評価損が計上されることや、大規模な設備投資の減損で経営成績・財政状況に大きな影響を与える可能性がある。

5【経営上の重要な契約等】

該当事項はない。

6【研究開発活動】

該当事項はない。

7【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績に重要な影響を与える要因および経営戦略の現状と見通しについて

一連の経済対策を受けて国内景気は回復基調にあり、当社グループの基幹事業である放送事業でも、三大都市圏ではその影響が表れてきている。一方、当社の放送エリアである北海道においては景気は緩やかに回復しているとされるが、その波及効果は三大都市圏には及ばない状況である。当社グループは視聴率・売上を更に高める努力を継続すると同時に、北海道というマーケットの価値を向上させる番組・コンテンツ制作を研究・実践していくことが、最大のテーマである。

(2) 当連結会計年度の財政状態・経営成績・財源及び資金の流動性についての分析

当社グループの資金状況は、営業活動によるキャッシュ・フローで22億22百万円のキャッシュを獲得した。放送事業を中心に各セグメントで営業利益を確保したことが要因である。投資活動においても、設備投資を適正に管理し、有価証券も安全性と効率性を重視した運用を行っている。グループ各社の与信状況も良好であり、今期も資金の高い流動性を保ちながら、経営を進めることが可能であると考えている。

(3) 経営者の問題認識と今後の方針について

当社グループの経営陣は、地域に密着した情報・文化を発信するとともに、上記の経営戦略のように北海道の価値をさらに高めていくことを重要な経営課題と位置づけている。視聴者やスポンサーのニーズに高いレベルで応える番組・商品を開発し、道内はもとより国内・海外へ向けて発信していくことが、大きなテーマとなる。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日現在において当社グループ（当社及び連結子会社）が判断したものである。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループは番組制作力の向上や営業力の強化を目指して、放送関係設備を中心に投資を行っている。当連結会計年度の設備投資（有形固定資産受入ベースの数値。金額には消費税等を含まない。）の内訳は、次のとおりである。

セグメントの名称	当連結会計年度	前年同期比
放送事業部門	754 百万円	109.9 %
ビル賃貸管理部門	846	29.2
制作プロダクション部門	34	188.9
情報処理部門	33	67.3
通信販売部門	-	-
計	1,667	45.7
消去又は全社	-	-
合計	1,667	45.7

当連結会計年度は、放送事業部門については放送設備更新、放送会館の老朽化設備更新を行っている。

放送事業部門：テレビスタジオ照明更新・手稲DTV2台化工事・釧路ラジオ送信所移転・編集ファイルベース対応
 所要資金は自己資金及び借入金によっている。

2【主要な設備の状況】

当社グループ（当社及び連結子会社）における主要な設備は、以下のとおりである。

(1) 提出会社

平成27年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)				合計	従業員数 (人)
			建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他		
本社 (札幌市中央区)	放送事業部門	管理・番組制作・ 販売・送出演務	1,505	855	1,530 (15,050)	173	4,063	171
手稲送信所 (札幌市西区)	"	番組送信業務	77	124	- (-)	-	201	-
角山送信所 (江別市)	"	番組送信業務	50	6	28 (92,406)	0	84	-
旭川放送局 (旭川市)	"	番組送信業務 販売業務	63	0	8 (4,250)	1	72	1
函館放送局 (函館市)	"	番組送信業務 販売業務	56	4	2 (3,655)	1	63	1
苫小牧放送局 (苫小牧市)	"	番組送信業務 販売業務	6	0	- (-)	0	6	1
帯広放送局 (帯広市)	"	番組送信業務 販売業務	25	3	- (-)	0	28	1
釧路放送局 (釧路市)	"	番組送信業務 販売業務	51	13	8 (11,645)	1	73	1
北見放送局 (北見市)	"	番組送信業務 販売業務	43	4	36 (8,930)	1	83	1

(注) 帳簿価額には建設仮勘定の金額は含んでいない。

(2) 国内子会社

平成27年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)
				建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
エス・テー・ ビー興発(株)	北2条ビル (札幌市中央区)	ビル賃貸 管理部門	貸店舗	1,059	23	66 (1,445)	6	1,154	-
"	北2条 タワーパーキング (札幌市中央区)	"	"	0	-	314 (347)	0	314	-
"	中央ビル (札幌市中央区)	"	"	705	-	190 (1,289)	0	895	-
"	北3条ビル (札幌市中央区)	"	"	284	19	319 (498)	1	623	-
"	時計台ビル (札幌市中央区)	"	"	1,402	3	1,274 (1,114)	4	2,682	-

(注) 帳簿価額には建設仮勘定の金額は含んでいない。

(3) 在外子会社

該当事項はない。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

該当事項はない。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はない。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	2,000,000
計	2,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (平成27年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成27年6月26日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	3,000	3,000	非上場	当社は単元株制度は 採用していない
計	3,000	3,000	-	-

(注)当社の株式を取得するには、取締役会の承認を要する旨定款に定めている。

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はない。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はない。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はない。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数 増減数(株)	発行済株式総数 残高(株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増減額 (百万円)	資本準備金残高 (百万円)
平成25年10月1日	1,497,000	3,000	-	750	-	-

(注)発行済株式総数の減少は、株式併合による減少分である。

(6)【所有者別状況】

平成27年3月31日現在

区分	株式の状況							計
	政府及び地方 公共団体	金融機関	金融商品取 引業者	その他の法 人	外国法人等		個人その他	
					個人以外	個人		
株主数(人)	6	7	-	45	-	-	78	136
所有株式数	8	481	-	2,097	-	-	414	3,000
所有株式数の 割合(%)	0.3	16.0	-	69.9	-	-	13.8	100

(注)自己株式278株は「個人その他」に含めて記載している。

(7) 【大株主の状況】

平成27年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式総数に対する所有株式の割合 (%)
日本テレビ放送網(株)	東京都港区東新橋1丁目6-1	744	24.80
(株)読売新聞東京本社	東京都千代田区大手町1丁目7-1	296	9.87
公益財団法人日本テレビ小嶋文化事業団	東京都千代田区四番町7-6	219	7.30
北海道電力(株)	札幌市中央区大通東1丁目2	190	6.33
(株)北洋銀行	札幌市中央区大通西3丁目7	136	4.53
(株)北海道銀行	札幌市中央区大通西4丁目1	136	4.53
第一生命保険(株)	東京都千代田区有楽町1丁目13-1	120	4.00
讀賣テレビ放送(株)	大阪市中央区城見2丁目2 33	120	4.00
中京テレビ放送(株)	名古屋市昭和区高峯町154	96	3.20
(株)福岡放送	福岡市中央区清川2丁目22番8号	94	3.13
計	-	2,151	71.70

(注)上記のほか、自己株式が278株ある。

(8) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成27年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 278	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 2,722	2,722	-
単元未満株式	-	-	-
発行済株式総数	3,000	-	-
総株主の議決権	-	2,722	-

【自己株式等】

平成27年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
札幌テレビ放送株式会社	札幌市中央区北1条西8丁目1番地1	278	-	278	9.27
計	-	278	-	278	9.27

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はない。

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条3号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はない。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はない。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第3号に該当する取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	43	85,097,000
当期間における取得自己株式	-	-

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
保有自己株式数	278	-	278	-

3【配当政策】

当社は、株主への安定配当の維持を重要な課題のひとつとして考え、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としている。これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会である。

当期(平成27年3月期)は、中間配当金を例年どおり1株当たり15,000円とした。期末配当については1株当たり95,629円を実施することに決定した。内部留保資金は将来の事業展開並びに設備投資等に役立てたいと考えている。

当社は、「取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めている。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりである。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
平成26年11月14日 取締役会決議	41	15,000
平成27年6月26日 定時株主総会決議	260	95,629

4【株価の推移】

当社株式は非上場及び非店頭銘柄であり該当事項はない。

5【役員 の 状 況】

男性 16名 女性 - 名 (役員のうち女性の比率 - %)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
代表取締役 会長兼社長	内部統制・ 経理局担当	島田 洋一	昭和18年 6月27日生	昭和42年4月 日本テレビ放送網(株)入社 平成9年6月 同社事業局長 平成12年6月 NTVインターナショナルコーポレーション取締役社長 平成15年6月 日本テレビ放送網(株)執行役員 (株)日本テレビエンタープライズ代表取締役社長 平成16年6月 日本テレビ放送網(株)取締役執行役員 平成19年6月 同社取締役常務執行役員 平成20年7月 同社取締役常務執行役員コンテンツ事業局長 平成21年6月 当社代表取締役社長 平成26年6月 当社代表取締役会長 平成27年6月 当社代表取締役会長兼社長(現任)	(注)3	1
常務取締役	編成局長 制作局長	今田 光春	昭和32年 11月8日生	昭和55年4月 当社入社 平成22年7月 当社編成局長 平成23年6月 当社取締役編成局長 平成27年6月 当社常務取締役編成局長兼制作局長(現任)	(注)3 (注)5	1
常務取締役	営業局長 事業局長 営業・技術局 担当	山本 雅弘	昭和31年 5月12日生	昭和55年4月 当社入社 平成22年7月 当社営業局専任局長兼営業推進センター長 平成23年7月 当社営業局長 平成24年6月 当社取締役営業局長 平成27年6月 当社常務取締役営業局長兼事業局長(現任)	(注)3 (注)5	1
取締役	報道局長	萬谷 慎太郎	昭和34年 6月25日生	昭和57年4月 当社入社 平成24年7月 当社報道制作局長 平成25年6月 当社取締役報道局長(現任)	(注)3	1
取締役	編成局補佐	北原 久史	昭和31年 5月15日生	昭和54年4月 (株)読売新聞社入社 平成16年3月 (株)読売新聞大阪本社経済部長 平成19年3月 (株)読売新聞東京本社調査研究本部主任研究員 平成20年9月 同社調査研究本部長兼出版部長 平成21年4月 同社調査研究本部長兼管理部長兼主任研究員 平成21年6月 同社調査研究本部長兼主任研究員 平成24年6月 同社メディア戦略局総務 平成25年4月 同社メディア局総務 平成26年6月 当社取締役(現任)	(注)3	-
取締役	経営計画室長 総務局長 コンプライア ンス推進室・ 関連会社担当	石部 善輝	昭和35年 7月25日生	昭和59年4月 当社入社 平成16年7月 当社営業局スピカ事業室部長 平成18年8月 当社営業局事業部長 平成24年7月 当社総務局人事部長 平成27年2月 当社経営計画室長 平成27年6月 当社取締役経営計画室長兼総務局長(現任)	(注)3 (注)5	-
取締役		小林 裕孝	昭和29年 7月15日生	昭和52年4月 日本テレビ放送網(株)入社 平成19年7月 同社人事局長 平成20年6月 同社執行役員人事局長 平成21年6月 同社取締役執行役員人事局長 平成21年12月 同社取締役執行役員総務局長・人事局長 平成22年6月 同社取締役執行役員人事局長 平成23年7月 同社取締役執行役員報道局長 平成24年6月 当社常務取締役総務局長 平成25年6月 当社代表取締役専務 平成26年6月 当社代表取締役社長 平成27年6月 当社取締役(現任)	(注)3	1
取締役		一ノ渡 朋典	昭和29年 2月16日生	昭和51年4月 当社入社 平成20年7月 (株)札幌映像プロダクション常務取締役 平成21年10月 同社代表取締役社長(現任) 平成25年6月 当社取締役(現任)	(注)3	-
取締役		大西 賢英	昭和34年 12月20日生	昭和57年4月 当社入社 平成25年7月 当社総務局長 平成26年6月 当社取締役総務局長 平成27年6月 (株)S T V ラジオ代表取締役社長(現任) 当社取締役(現任)	(注)3	1

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
取締役		白石 興二郎	昭和21年 9月8日生	昭和44年4月 ㈱読売新聞社入社 平成14年6月 同社執行役員メディア戦略局長 平成14年7月 ㈱読売新聞東京本社執行役員メディア戦略局長 平成16年1月 同社取締役 平成19年6月 同社常務取締役 平成22年6月 同社専務取締役 平成23年6月 ㈱読売新聞グループ本社代表取締役社長(現任) ㈱読売新聞東京本社代表取締役社長 当社取締役(現任) 平成27年6月 ㈱読売新聞東京本社代表取締役会長(現任)	(注)3	-
取締役		大久保 好男	昭和25年 7月8日生	昭和50年4月 ㈱読売新聞社入社 平成20年6月 ㈱読売新聞東京本社執行役員メディア戦略局長 平成21年6月 同社取締役メディア戦略局長 平成22年6月 日本テレビ放送網(現・日本テレビホールディングス ㈱)取締役執行役員 平成23年6月 同社代表取締役社長執行役員 当社取締役(現任) 平成24年4月 日本テレビ分館準備(現・日本テレビ放送網) 代表取締役 平成24年10月 日本テレビ放送網(現)代表取締役社長執行役員(現任) 日本テレビホールディングス(現)代表取締役社長(現任)	(注)3	-
取締役		山田 範保	昭和23年 6月12日生	昭和48年4月 通商産業省入省 平成10年6月 日本貿易振興会ニューヨーク・センター所長 平成12年6月 通商産業省通商政策局経済協力部長 平成13年1月 環境省大臣官房審議官 平成15年7月 財団法人製品輸入促進協会理事長 (現・財団法人対日貿易投資交流促進協会) 平成17年7月 北海道電力(株)理事企画部部長 平成18年3月 同社理事事業推進部部長 平成19年4月 同社理事旭川支店長 平成20年6月 同社常務取締役札幌支店長 平成23年6月 同社顧問 平成25年6月 同社囑託(現任) 平成26年6月 当社取締役(現任)	(注)3	-
常勤 監査役		五十嵐 芳明	昭和25年 5月16日生	昭和49年4月 当社入社 平成19年2月 当社総務局専任局長 平成20年2月 当社編成局専任局長 平成20年12月 当社役員待遇IT推進センター長 平成22年2月 ㈱エイチ・アイ・ディ取締役副社長 平成24年6月 当社常勤監査役(現任)	(注)4	-
監査役		島津 宏興	昭和14年 4月22日生	昭和46年3月 弁護士登録 平成2年7月 北海道教育委員 平成13年10月 北海道教育委員長 平成16年6月 当社監査役(現任)	(注)4	-
監査役		久保 伸太郎	昭和19年 4月22日生	昭和43年4月 ㈱読売新聞社入社 平成15年6月 日本テレビ放送網(株)取締役営業局長 平成16年6月 同社取締役常務執行役員 平成17年6月 同社代表取締役社長執行役員 平成21年3月 同社取締役相談役 平成23年6月 ㈱読売新聞東京本社相談役(現任) 日本テレビ放送網(株)顧問(現任) 平成24年6月 当社監査役(現任)	(注)4	-
監査役		中田 博幸	昭和24年 8月16日生	昭和47年4月 札幌市採用 平成18年4月 札幌市観光文化局長 平成19年7月 札幌市副市長 平成23年7月 公益財団法人札幌国際プラザ代表理事・副理事長(現任) 平成24年6月 当社監査役(現任)	(注)4	-
計						6

- (注)1. 取締役 白石興二郎、大久保好男、山田範保の各氏は、社外取締役である。
(注)2. 監査役 島津宏興、久保伸太郎、中田博幸の各氏は、社外監査役である。
(注)3. 平成27年6月26日開催の定時株主総会の終結の時から1年間である。
(注)4. 平成24年6月28日開催の定時株主総会の終結の時から4年間である。

(注) 5. 平成27年7月1日をもって、次のとおり役員の役職の異動を予定している。

氏名	新役職名	旧役職名
今田 光春	常務取締役編成局長 (制作局担当)	常務取締役編成局長兼制作局長
山本 雅弘	常務取締役営業局長 (営業・事業局・技術局担当)	常務取締役営業局長兼事業局長 (営業・技術局担当)
石部 善輝	取締役経営計画室長 (コンプライアンス推進室・総務局・関連会社担当)	取締役経営計画室長兼総務局長 (コンプライアンス推進室・関連会社担当)

6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの状況】

コーポレート・ガバナンスにおける基本的な考え方

当社は、放送局として視聴者に対する社会的責任を果たすと同時に、株主から委託された資本を有効且つ適切に運用し、経営成果をあげて分配していくという二つの使命を負っており、そのために必要な経営行動の統治を企業統治の課題と捉えている。

コーポレート・ガバナンスに関する施策の実施状況

イ. 内部統制の仕組み

当社は、監査役制度を採用しており、監査役による監査を柱とする経営監視体制を構築している。また監査役4名のうち3名が社外監査役であり、社外からの経営監査機能を取り入れている。

ロ. 業務執行・監視の仕組み

当社は、取締役会規則、取締役会付議基準を制定して、法定の事項はもとより経営に関する重要事項は取締役会決議によって決定している。また当社は社外取締役を3名選任し、取締役会での意見・提言を通して社外からの経営監視・監督機能を強化している。また、日常の業務執行については、週1回、局長会を開催し、その中で重要な業務執行に関する報告及び承認をうけ、リスクマネジメントを徹底し、迅速且つ適切な意思決定を行っている。さらに、平成17年にコンプライアンス推進室を設置し、放送倫理の遵守や番組及びCMに関する考査を行う他、企業倫理向上への取り組み強化や法令遵守の徹底を図るなど不正行為の予防に努めている。

ハ. 内部監査及び監査役監査の状況

当社は内部監査の専門部署を設置していないが、内部統制担当の取締役を置くとともに、総務局および経理局が契約書、社内決裁書類等及び社内伝票のチェック、各部門へのヒアリング等を通じて業務執行の公正化、適正化に努めている。

監査役は取締役会等重要な会議への出席、社内決裁書類の閲覧を通して、重要事案の審議・決定、取締役の職務執行ならびに業務執行のチェックを行っている。さらに常勤監査役は定期的に支社・支局・関連会社を回り業務監査を実施し、結果を代表取締役社長、総務局長へ報告している。重要な支社には経理担当者も同行して内部監査を行っている。また常勤監査役及び社外監査役は会計監査人との間で、監査報告会その他適宜意見交換を行い、連携して業務執行の監視・検証をしている。

ニ. その他第三者からのコーポレート・ガバナンス体制

顧問弁護士からは、コンプライアンスに関わる問題について必要に応じ助言を得ている。会計監査人については、有限責任 あずさ監査法人と監査契約を締結して会計監査を受けている。

ホ. 社外取締役及び社外監査役と提出会社との関係

社外取締役、社外監査役との関係は次のとおりである。

- ・社外取締役大久保好男氏は、日本テレビ放送網株代表取締役であり、同社とは放送番組の供給を受けるとともに番組購入の取引関係があるが、社外取締役個人が直接利害関係を有するものではない。
 - ・社外取締役白石興二郎氏、山田範保氏、及び社外監査役島津宏興氏、久保伸太郎氏、中田博幸氏は当社との間に特別な利害関係はない。
 - ・なお、山田範保氏は、経営者としての豊富な経験と専門分野に関する幅広い見識を当社の経営に反映していただくため、白石興二郎氏、大久保好男氏は、経営者としての豊富な経験とメディア業界の知識を当社の経営に反映していただくため社外取締役に選任し、取締役会を始めとする会議で意見・提言を求めている。
 - ・社外監査役島津宏興氏、久保伸太郎氏、中田博幸氏は法律、メディア業界、行政の専門的知見と経験を有しており、4名の監査役のうち3名の社外監査役を選任することで監視機能を強化し、監査役会を中心に独立した立場から経営への監視を頂いている。
- 当社は、社外取締役又は社外監査役を選任するための独立性に関する基準又は方針として明確に定めたものはないが、選任にあたっては、経歴や当社との関係を踏まえて、当社経営陣からの独立した立場で社外役員としての職務を遂行できる十分な独立性が確保できることを前提に判断している。

ヘ. 会計監査に関する事項

会計監査人は有限責任 あずさ監査法人を選任し、正確な経営情報を提供するなど公正な立場から監査を実施される環境を整えている。なお、有限責任 あずさ監査法人及びその指定有限責任社員と当社の間には特別な利害関係はなく、会社法監査と金融商品取引法監査について監査契約書を取り交わし、契約書に基づいて監査報酬を支払っている。

当期において会計監査業務を執行した公認会計士は佐野裕氏と田辺拓央氏であり、有限責任 あずさ監査法人に所属している。

また、会計監査業務に係る補助者は、公認会計士6名、その他2名である。

役員報酬

取締役に対する報酬 支給人員 14人 支給額 127百万円 (うち社外取締役4人 7百万円)

監査役に対する報酬 支給人員 4人 支給額 17百万円 (うち社外監査役3人 3百万円)

取締役の定数

当社は、取締役を20名以内とする旨を定款で定めている。

取締役選任および解任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が株主総会に出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款で定めている。また解任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の過半数を有する株主が株主総会に出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めている。

株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うため、会社法309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって決議を行う旨を定款で定めている。

中間配当の決議

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨を定款で定めている。

取締役、監査役及び会計監査人の責任免除

当社は、取締役、監査役及び会計監査人が職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるよう、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役(取締役であった者を含む)監査役(監査役であった者を含む)及び会計監査人(会計監査人であった者を含む)の損害賠償責任を、法令の限度において取締役会の決議によって免除することができる旨定款に定めている。

責任限定契約の内容

当社と非業務執行取締役及び監査役は、会社法第427条第1項の規定により、任務を怠ったことによる非業務執行取締役及び監査役の会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結している。当該契約に基づく賠償責任限度額は、金100万円または法令の定める最低責任限度額のいずれか高い額としている。

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	13	0	13	-
連結子会社	-	-	-	-
計	13	0	13	-

【その他重要な報酬の内容】

該当事項はない。

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に支払っている非監査業務の内容は、会計アドバイザー業務である。

(当連結会計年度)

特に記載すべき事項はない。

【監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬は、新事業年度の開始時に有限責任 あずさ監査法人が予定する当該監査に係る業務内容と年間見積時間を想定して監査法人所定の標準報酬規定に基づき見積を作成し、それを基に双方が協議して合意した契約により決定している。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成している。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成している。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成している。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人により監査を受けている。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、会計基準等の内容を適切に把握し、連結財務諸表等の適正性を確保するため、監査法人等が主催する研修会への参加並びに会計専門書の定期購読を行っている。また、株式会社TKCの連結会計システム「eCA-DRIVER」や、株式会社プロネクサスの有価証券報告書作成ソフト「プロネクサスワークス」を導入するなどして、会計処理業務を標準化することで、業務の効率化や管理機能の拡充を図っている。また、これらのシステムにより会計制度の変更に素早く対応するとともに、各社の専門機関のチェック等を活用し、連結財務諸表等の正確化を図っている。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	7,708	8,747
受取手形及び売掛金	4,932	4,144
有価証券	3,861	2,927
たな卸資産	4,167	4,95
繰延税金資産	266	116
その他	451	169
貸倒引当金	0	1
流動資産合計	17,385	16,197
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	1,315,082	1,315,459
減価償却累計額	9,376	9,535
建物及び構築物(純額)	5,706	5,924
機械装置及び運搬具	312,975	313,428
減価償却累計額	11,776	12,094
機械装置及び運搬具(純額)	1,198	1,333
土地	1,33,839	1,33,834
建設仮勘定	13	15
その他	1,759	1,884
減価償却累計額	1,118	1,005
その他(純額)	641	879
有形固定資産合計	11,397	11,986
無形固定資産		
その他	3801	3318
無形固定資産合計	801	318
投資その他の資産		
投資有価証券	25,654	27,282
長期貸付金	122	106
繰延税金資産	129	22
退職給付に係る資産	225	807
長期預金	10	10
その他	615	262
貸倒引当金	61	55
投資その他の資産合計	6,694	8,434
固定資産合計	18,891	20,738
資産合計	36,277	36,934

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	1,073	583
短期借入金	1,939	1,289
リース債務	193	24
未払法人税等	54	326
未払消費税等	49	221
未払費用	478	360
未払金	386	422
その他	1,030	1,059
流動負債合計	4,201	3,285
固定負債		
長期借入金	1,269	1,296
リース債務	390	322
繰延税金負債	586	1,139
アナログ設備撤去引当金	102	79
役員退職慰労引当金	81	70
退職給付に係る負債	472	173
その他	730	793
固定負債合計	5,056	5,482
負債合計	9,257	8,767
純資産の部		
株主資本		
資本金	750	750
利益剰余金	25,127	25,565
自己株式	465	550
株主資本合計	25,412	25,765
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	1,726	2,459
退職給付に係る調整累計額	264	57
その他の包括利益累計額合計	1,461	2,402
少数株主持分	146	-
純資産合計	27,020	28,167
負債純資産合計	36,277	36,934

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
売上高	21,554	19,781
売上原価	13,340	11,717
売上総利益	8,215	8,064
販売費及び一般管理費		
人件費	2,579	2,454
代理店手数料	2,542	2,610
退職給付費用	134	96
役員退職慰労引当金繰入額	23	22
減価償却費	192	178
その他	1,772	1,694
販売費及び一般管理費合計	7,243	7,054
営業利益	972	1,010
営業外収益		
受取利息	27	25
受取配当金	97	103
デリバティブ評価益	8	-
その他	46	37
営業外収益合計	178	166
営業外費用		
支払利息	32	31
その他	6	2
営業外費用合計	39	33
経常利益	1,112	1,143
特別利益		
固定資産売却益	110	125
投資有価証券売却償還益	66	5
関係会社株式売却益	-	8
国庫補助金	16	7
環境対策費戻入益	43	-
賃貸借契約解約益	-	13
その他	-	4
特別利益合計	135	63
特別損失		
固定資産除売却損	260	244
投資有価証券売却償還損	0	-
固定資産圧縮損	15	7
役員退職慰労金	-	7
アナログ設備撤去引当金繰入額	50	-
その他	15	2
特別損失合計	139	60
税金等調整前当期純利益	1,107	1,147
法人税、住民税及び事業税	138	387
法人税等調整額	292	181
法人税等合計	430	569
少数株主損益調整前当期純利益	678	578
少数株主損失()	14	10
当期純利益	692	588

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	678	578
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	401	733
退職給付に係る調整額	-	207
その他の包括利益合計	401	940
包括利益	1,079	1,518
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,093	1,528
少数株主に係る包括利益	14	10

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	750	24,581	0	25,330
当期変動額				
剰余金の配当		145		145
当期純利益		692		692
自己株式の取得			464	464
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				
当期変動額合計	-	546	464	82
当期末残高	750	25,127	465	25,412

	その他の包括利益累計額			少数株主持分	純資産合計
	その他 有価証券評価差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益累計額合計		
当期首残高	1,324	-	1,324	160	26,815
当期変動額					
剰余金の配当					145
当期純利益					692
自己株式の取得					464
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	401	264	137	14	123
当期変動額合計	401	264	137	14	205
当期末残高	1,726	264	1,461	146	27,020

当連結会計年度（自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	750	25,127	465	25,412
当期変動額				
剰余金の配当		150		150
当期純利益		588		588
自己株式の取得			85	85
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				
当期変動額合計		438	85	353
当期末残高	750	25,565	550	25,765

	その他の包括利益累計額			少数株主持分	純資産合計
	その他 有価証券評価差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益累計額合計		
当期首残高	1,726	264	1,461	146	27,020
当期変動額					
剰余金の配当					150
当期純利益					588
自己株式の取得					85
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	733	207	940	146	794
当期変動額合計	733	207	940	146	1,147
当期末残高	2,459	57	2,402	-	28,167

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,107	1,147
減価償却費	1,136	1,078
退職給付引当金の増減額（は減少）	460	-
退職給付に係る負債の増減額（は減少）	472	333
役員退職慰労引当金の増減額（は減少）	2	15
貸倒引当金の増減額（は減少）	2	6
アナログ設備撤去引当金の増減額（は減少）	18	23
受取利息及び受取配当金	124	129
支払利息	32	31
金融派生商品評価損益（は益）	8	-
投資有価証券売却償還損益（は益）	66	5
関係会社株式売却損益（は益）	-	8
有形固定資産除売却損益（は益）	50	18
国庫補助金	16	7
固定資産圧縮損	15	7
売上債権の増減額（は増加）	172	290
仕入債務の増減額（は減少）	333	224
たな卸資産の増減額（は増加）	43	175
未払消費税等の増減額（は減少）	20	179
前払年金費用の増減額（は増加）	452	-
退職給付に係る資産の増減額（は増加）	225	582
その他	649	305
小計	2,256	2,244
利息及び配当金の受取額	124	129
利息の支払額	35	31
法人税等の支払額	236	120
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,110	2,222
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	2,270	7,955
定期預金の払戻による収入	1,980	6,985
有形固定資産の取得による支出	3,840	1,287
有形固定資産の売却による収入	27	31
無形固定資産の取得による支出	280	80
国庫補助金の受取による収入	16	7
投資有価証券の取得による支出	1,417	839
投資有価証券の売却及び償還による収入	333	278
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	-	598
貸付けによる支出	4	1
貸付金の回収による収入	23	17
その他	9	9
投資活動によるキャッシュ・フロー	5,440	2,255

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（は減少）	20	250
長期借入れによる収入	2,600	500
長期借入金の返済による支出	768	689
自己株式の取得による支出	464	85
ファイナンスリース債務の返済による支出	53	28
配当金の支払額	146	151
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,189	702
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	2,141	735
現金及び現金同等物の期首残高	10,175	8,034
現金及び現金同等物の期末残高	8,034	7,299

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(イ) 連結子会社の数 4社

- ・エス・テー・ビー興発㈱
- ・㈱札幌映像プロダクション
- ・㈱エス・テー・ビー開発センター
- ・㈱STVラジオ

㈱エイチ・アイ・ディについては保有株式の全てを平成26年9月19日付で売却したことから、連結子会社より除外している。

(ロ) 主要な非連結子会社の名称等

- ・エステービー・メディアセンター㈱

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益及び利益剰余金等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためである。

2. 持分法の適用に関する事項

(イ) 持分法適用の非連結子会社及び関連会社 なし

(ロ) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社のうち主要な会社等の名称

- ・エステービー・メディアセンター㈱

(持分法の適用対象から除いた理由)

持分法非適用会社は当期純損益及び利益剰余金に及ぼす影響が軽微でありかつ全体としても重要性がないため、持分法の適用から除外している。

3. 連結子会社の事業年度に関する事項

連結子会社の決算日と連結決算日は一致している。

4. 会計処理基準に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

(イ) 有価証券

子会社株式及び関連会社株式 移動平均法に基づく原価法

その他有価証券

時価のあるもの

連結会計年度末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

なお、組込デリバティブを区分して測定することができない複合金融商品は、全体を時価評価し、評価差額を当連結会計年度の損益に計上している。

時価のないもの 移動平均法に基づく原価法

(ロ) たな卸資産(貸借対照表価額は、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

番組勘定 個別法に基づく原価法

その他 先入先出法又は個別法に基づく原価法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

(イ) 有形固定資産(リース資産を除く) 定率法

ただし、平成10年4月1日以降取得した建物(建物附属設備は除く)については定額法によっている。

なお、主な耐用年数は、次のとおりである。

建物及び構築物 2~50年 機械装置及び運搬具 2~22年

(ロ) 無形固定資産(リース資産を除く) 定額法

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっている。

(ハ) リース資産

所有権移転外ファイナンスリース取引に係るリース資産

有形固定資産、無形固定資産共にリース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっている。

(3) 重要な引当金の計上基準

(イ) 貸倒引当金

売上債権等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上している。

(ロ) アナログ設備撤去引当金

アナログ設備の撤去及び除却に係る将来の支出に備えるため、発生が見込まれる額を計上している

(ハ) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上している。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付に係る資産及び負債は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における見込額に基づき、退職給付債務から年金資産を控除した額を計上しています。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっている。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（12年）により定率償却した金額をそれぞれ発生年度から費用処理している。

小規模企業等における簡便法の採用

当社の一部の制度及び連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用している。

(5) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなる。

(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理 消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外諸費税額及び地方消費税は、当連結会計年度の費用として処理している。

(連結貸借対照表関係)

1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
建物	2,260百万円	2,390百万円
土地	1,789	1,783
計	4,049	4,173

担保付債務は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
短期借入金	289百万円	289百万円
長期借入金	2,695	2,906
計	2,984	3,195

2 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
投資有価証券(株式)	200百万円	218百万円

3 圧縮記帳の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
建物	42百万円	42百万円
構築物	219	218
機械及び装置	176	181
土地	828	828
施設利用権	2	2

4 たな卸資産の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
商品及び製品	60百万円	61百万円
仕掛品	67	7
番組助定	32	20
貯蔵品	7	6

(連結損益計算書関係)

1 固定資産売却益の内容は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
建物	1百万円	1百万円
構築物	4	4
機械及び装置	5	2
土地	-	19
計	10	25

2 固定資産除売却損の内容は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
建物	19百万円	9百万円
構築物	1	7
機械及び装置	20	3
工具及び器具	1	0
その他	19	24
計	60	44

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	684百万円	958百万円
組替調整額	60	0
税効果調整前	623	958
税効果額	222	225
その他有価証券評価差額金	401	733
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	-百万円	307百万円
組替調整額	-	18
税効果調整前	-	325
税効果額	-	118
退職給付に係る調整額	-	207
その他の包括利益合計	401	940

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	1,500,000	-	1,497,000	3,000
合計	1,500,000	-	1,497,000	3,000
自己株式				
普通株式	154	384	303	235
合計	154	384	303	235

- (注) 1. 発行済株式の総数の減少は、株式併合によるものである。
2. 自己株式の数の増加は、単元未満株の買取り及び株式の併合に伴う端株の買取りによる増加である。
3. 自己株式の株の減少は、株式併合によるものである。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
平成25年6月27日 定時株主総会	普通株式	100百万円	67円	平成25年3月31日	平成25年6月28日
平成25年11月15日 取締役会	普通株式	45百万円	30円	平成25年9月30日	平成25年12月24日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
平成26年6月27日 定時株主総会	普通株式	109百万円	利益剰余金	39,562円	平成26年3月31日	平成26年6月30日

当連結会計年度（自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	3,000	-	-	3,000
合計	3,000	-	-	3,000
自己株式				
普通株式	235	43	-	278
合計	235	43	-	278

(注) 1. 自己株式の数の増加は、株式譲渡制限設定に伴う反対株主からの買取による増加である。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
平成26年6月27日 定時株主総会	普通株式	109百万円	39,562円	平成26年3月31日	平成26年6月30日
平成26年11月14日 取締役会	普通株式	41百万円	15,000円	平成26年9月30日	平成26年12月15日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額	配当の原資	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
平成27年6月26日 定時株主総会	普通株式	260百万円	利益剰余金	95,629円	平成27年3月31日	平成27年6月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
現金及び預金勘定	7,708百万円	8,747百万円
預入期間が3か月を超える定期預金	3,375	4,345
随時換金可能で僅少なリスクの有価証券	3,701	2,897
現金及び現金同等物	8,034	7,299

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

ビル管理賃貸部門及び制作プロダクション部門における生産設備（機械装置・工具器具備品）である。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計処理基準に関する事項（2）重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりである。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
1年内	5百万円	1百万円
1年超	2	1
合計	7	2

(貸主側)

1. ファイナンス・リース取引

(1) リース投資資産の内訳

流動資産

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
リース料債権部分	154百万円	- 百万円
見積残存価額部分	-	-
受取利息相当額	-	-
リース投資資産	154	-

投資その他の資産

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
リース料債権部分	295百万円	- 百万円
見積残存価額部分	-	-
受取利息相当額	-	-
リース投資資産	295	-

(2) リース投資資産に係るリース料債権部分の連結決算日後の回収予定額

流動資産

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース投資資産(百万円)	154	-	-	-	-	-

	当連結会計年度 (平成27年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース投資資産(百万円)	-	-	-	-	-	-

投資その他の資産

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース投資資産(百万円)	-	122	96	56	20	-

	当連結会計年度 (平成27年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース投資資産(百万円)	-	-	-	-	-	-

2. 転リース取引に該当し、かつ、利息相当額控除前の金額で連結貸借対照表に計上している額

(1) リース投資資産

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
流動資産	154百万円	- 百万円
投資その他の資産	295	-

(2) リース債務

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
流動負債	154百万円	- 百万円
固定負債	295	-

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1)金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については安全で流動性の高い金融資産を主とし、また資金調達については経営計画に基づき必要な資金を銀行等金融機関から調達している。デリバティブ取引は複合金融商品の組込デリバティブを利用している。

(2)金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は顧客の信用リスクに晒されている。また有価証券及び投資有価証券はその他有価証券であり、価格変動リスク及びデフォルトリスクに晒されている。

営業債務である支払手形及び買掛金はそのほとんどが1年以内の支払期日であり、借入金の使途は設備投資資金(長期)である。デリバティブ取引は、複合金融商品の組込デリバティブを利用している。複合金融商品については、安全性が高くかつ金利環境に応じた資金運用目的に限定して利用している。投機的な取引及び短期的な売買損益を得る取引の利用は行っていない。なお、複合金融商品の評価方法については、前述の「会計処理基準に関する事項」の「その他有価証券」に記載している。

(3)金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社は、営業債権である受取手形及び売掛金に係る顧客の信用リスクは営業局業務企画部他管理部門が主要な取引先をモニタリングし、リスク低減を図っている。連結子会社についても、同様の管理を行なっている。

また有価証券及び投資有価証券は主として株式・投資信託・債券等であり定期的に時価の把握を行っている。複合金融商品については相手先は信用力の高い金融機関に限定しているため、相手先の契約不履行による信用リスクはほとんどないものと認識している。

市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

当社の外貨建ての営業債権債務は、海外支店の活動経費など一部の取引に限られており、為替リスクは僅少である。

有価証券及び投資有価証券については、金利の動向による時価の変動等を総務局でモニタリングしており、市況や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直している。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社は、長期的な設備投資計画に基づき担当部署が適時に資金繰計画を作成しつつ、相当程度の手許流動性を維持しており、流動性リスクを管理している。

(4)金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれている。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがある。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりである。

前連結会計年度(平成26年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1)現金及び預金	7,708	7,708	-
(2)受取手形及び売掛金	4,932	4,932	-
(3)有価証券及び投資有価証券	8,908	8,908	-
資産計	21,548	21,548	-
(1)支払手形及び買掛金	1,073	1,073	-
(2)短期借入金	250	250	-
(3)長期借入金	3,384	3,417	33
負債計	4,706	4,739	33

当連結会計年度(平成27年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1)現金及び預金	8,747	8,747	-
(2)受取手形及び売掛金	4,144	4,144	-
(3)有価証券及び投資有価証券	9,597	9,597	-
資産計	22,488	22,488	-
(1)支払手形及び買掛金	583	583	-
(2)短期借入金	-	-	-
(3)長期借入金	3,195	3,226	31
負債計	3,778	3,809	31

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法及び有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済され、時価は帳簿価額にほぼ等しい事から当該帳簿価額によっている。

(3) 有価証券及び投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関等から提示された価格によっている。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」に記載している。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 短期借入金

これらは短期間で決済され、時価は帳簿価額にほぼ等しい事から当該帳簿価額によっている。

(3) 長期借入金

元利金の合計を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっている。

(注) 2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

区分	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
非上場株式(百万円)	606	613

これらについては市場価格が無く、かつ将来キャッシュフローを見積もる事ができず、時価を把握する事が困難と認められるため、

(3) 有価証券及び投資有価証券には含めていない。

(注) 3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(平成26年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	7,708	-	-	-
受取手形及び売掛金	4,932	-	-	-
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの				
(1) 債券	160	657	10	120
(2) その他	-	-	-	-
合計	12,800	657	10	120

当連結会計年度(平成27年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	8,747	-	-	-
受取手形及び売掛金	4,144	-	-	-
有価証券及び投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの				
(1) 債券	30	1,027	10	-
(2) その他	-	-	-	-
合計	12,921	1,027	10	-

(注) 4. 長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(平成26年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	250	-	-	-	-	-
長期借入金	689	239	239	239	239	1,740
リース債務	193	157	124	77	32	-
合計	1,132	396	363	316	271	1,740

当連結会計年度(平成27年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	-	-	-	-	-	-
長期借入金	289	339	339	339	339	1,552
リース債務	24	24	24	24	24	225
合計	313	363	363	363	362	1,777

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(平成26年3月31日)

区分		連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	3,166	729	2,437
	債券	282	279	3
	その他	544	451	93
	小計	3,991	1,459	2,533
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	81	99	18
	債券	666	668	2
	その他	4,170	4,217	47
	小計	4,917	4,984	67
合計		8,908	6,443	2,466

(注) 1. 連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるものおよび連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないものの債券には複合金融商品が含まれており、その評価益8百万円を連結損益計算書の営業外損益の部に計上している。

2. 非上場株式(連結貸借対照表計上額 606百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

当連結会計年度(平成27年3月31日)

区分		連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	4,156	912	3,244
	債券	460	457	3
	その他	937	751	186
	小計	5,553	2,120	3,433
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	15	16	1
	債券	620	622	2
	その他	3,408	3,413	5
	小計	4,043	4,051	8
合計		9,597	6,171	3,425

(注) 1. 連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるものおよび連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないものの債券に含まれていた複合金融商品は売却し、その売却益5百万円は連結損益計算書の特別利益に計上している。

2. 非上場株式(連結貸借対照表計上額 613百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自平成25年4月1日至平成26年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	179	62	-
(2) 債券			
国債・地方債等	40	-	-
社債	111	4	0
(3) その他	-	-	-
合計	330	66	0

当連結会計年度(自平成26年4月1日至平成27年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	-	-	-
(2) 債券			
国債・地方債等	130	-	0
社債	147	5	-
(3) その他	-	-	-
合計	277	5	0

3. 減損処理を行った有価証券

該当事項はない。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得価額に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30~50%程度下落した場合には、当該金額の重要性、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っている。

(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度(自平成25年4月1日至平成26年3月31日)

- ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引
複合金融商品の組込デリバティブの時価及び評価損益は(金融商品関係)及び(有価証券関係)に含めて記載している。
- ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引
該当事項はない。

当連結会計年度(自平成26年4月1日至平成27年3月31日)

- ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引
該当事項はない。
- ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引
該当事項はない。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用している。

確定給付企業年金制度(すべて積立型制度である。)では、給与と勤務期間に基づいた一時金又は年金を支給する。

なお、一部の確定給付企業年金制度には、退職給付信託が設定されている。

退職一時金制度(非積立型制度だが、退職給付信託を設定した結果、積立型制度となっているものがある。)では、退職給付として、給与と勤務期間に基づいた一時金を支給する。

当社及び連結子会社が有する一部の確定給付企業年金制度及び退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算している。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表(簡便法を適用した制度を除く)

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
退職給付債務の期首残高	3,471百万円	3,356百万円
勤務費用	110	108
利息費用	31	30
数理計算上の差異の発生額	56	14
退職給付の支払額	312	309
退職給付債務の期末残高	3,356	3,171

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表(簡便法を適用した制度を除く)

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
年金資産の期首残高	3,253百万円	3,581百万円
期待運用収益	54	58
数理計算上の差異の発生額	231	294
事業主からの拠出額	355	355
退職給付の支払額	312	309
年金資産の期末残高	3,581	3,979

(3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に関わる負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	460百万円	472百万円
退職給付費用	45	23
退職給付の支払額	33	14
連結範囲の変更に伴う減少	-	307
退職に係る負債の期末残高	472	173

(4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	3,356百万円	3,171百万円
年金資産	3,581	3,979
	225	807
非積立型制度の退職給付債務	472	173
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	247	634
退職給付に係る負債	472	173
退職給付に係る資産	225	807
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	247	634

(注) 簡便法を適用した制度を含む。

(5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
勤務費用	154百万円	108百万円
利息費用	31	30
期待運用収益	54	58
数理計算上の差異の費用処理額	87	18
簡便法で計算した退職給付費用	-	23
確定給付制度に係る退職給付費用	219	120

(6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりである

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
未認識数理計算上の差異	-百万円	325百万円
合計	-	325

(7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
未認識数理計算上の差異	408百万円	83百万円
合計	408	83

(8) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
債券	28%	28%
株式	36	37
一般勘定	33	31
その他	3	4
合計	100	100

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度19%、当連結会計年度20%含まれている。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮している。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしている。)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
割引率	0.9%	0.9%
長期期待運用収益率	2.0%	2.0%

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度46百万円、当連結会計年度46百万円である。

(税効果関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
(繰延税金資産)		
税務上の繰越欠損金	270百万円	23百万円
退職給付に係る資産	332	55
未払賞与	150	105
有価証券評価損	495	404
その他	216	145
繰延税金資産小計	1,464	732
評価性引当額	713	552
繰延税金資産合計	751	180
(繰延税金負債)		
土地圧縮積立金	18	17
退職給付信託	182	199
その他有価証券評価差額金	740	966
その他	2	0
繰延税金負債合計	942	1,182
繰延税金資産の純額	191	1,002

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当連結会計年度 (平成27年3月31日)
法定実効税率 (調整)	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。	35.3%
交際費等永久に損金に算入されない項目		1.8%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目		2.3%
住民税均等割等		0.3%
評価性引当額		4.1%
税率変更による影響		0.8%
連結子会社株式売却損益の連結修正		20.6%
税額控除		1.2%
その他		0.1%
税効果会計適用後の法人税等の負担率		49.6%

3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成27年法律第9号)及び「地方税法等の一部を改正する法律」(平成27年法律第2号)が平成27年3月31日に公布され、平成27年4月1日以後に開始する連結会計年度から法人税率等の引き下げ等が行われることとなった。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の35.3%から平成27年4月1日に開始する連結会計年度に解消が見込まれる一時差異については32.8%に、平成28年4月1日以降に開始する連結会計年度に解消が見込まれる一時差異については、32.0%になる。

この税率変更により、繰延税金資産の金額(繰延税金負債の金額を控除した金額)は107百万円増加し、法人税等調整額が9百万円減少、その他有価証券評価差額金が100百万円増加、退職給付に係る調整累計額が3百万円減少している。

(企業結合等関係)

事業分離

当社グループは、平成26年9月19日付で、連結子会社株式会社エイチ・アイ・ディの全株式を、ソフトウェア情報開発株式会社に譲渡した。

(1) 事業分離の概要

分離先企業の名称

ソフトウェア情報開発株式会社

分離した事業の内容

電算機業務・システム開発・機器販売

事業分離を行った主な理由

株式会社エイチ・アイ・ディは当社のシステム開発の中核を担い、WEBやデータ放送でも技術的な役割を果たすなど長年当社グループに貢献してきた。しかし、同業他社との競争激化により事業環境が厳しさを増すなか、将来に向けて更なる発展と事業の拡大を目指すためには、業態の異なる放送局の傘下に留まるよりも、同業他社と連携してシナジー効果を発揮することが必要であるとの結論に至ったもの。

事業分離日

平成26年9月19日

その他取引の概要に関する事項(法的形式を含む)

事業分離の法的形式 受取対価を現金等の財産のみとする株式譲渡

譲渡する株式の数 170,000株

譲渡価額 818百万円

(2) 実施した会計処理の概要

移転損益の金額

関係会社株式売却益 8百万円

移転した事業に係る資産及び負債の適正な帳簿価額並びにその主な内訳

流動資産 1,209百万円

固定資産 1,061

資産合計 2,270

流動負債 646百万円

固定負債 720

負債合計 1,366

会計処理

「事業分離等に関する会計基準」(企業会計基準第7号 平成20年12月26日公表分)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号 平成20年12月26日公表分)に基づき処理している。

(3) 分離した事業が含まれていた報告セグメントの名称

情報処理部門

(4) 当連結会計年度の連結損益計算書に計上されている分離した事業に係る損益の概算額

売上高 1,375百万円

営業損失 191

(賃貸等不動産関係)

当社及び当社の子会社では、札幌市内において賃貸用のオフィスビル、商業用ビル(土地を含む)等を有している。平成26年3月期における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は5億32百万円である。平成27年3月期における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は4億69百万円である。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、当連結会計年度増減額及び時価は、次のとおりである。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
連結貸借対照表計上額		
期首残高	3,608	6,303
期中増減額	2,695	463
期末残高	6,303	6,766
期末時価	8,445	9,302

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額である。
2. 期中増減額のうち、前連結会計年度の主な増加額は賃貸用オフィスビルの取得(2,811百万円)、主な減少額は建物の減価償却(136百万円)である。当連結会計年度の主な増加額は賃貸用オフィスビルの耐震化などの設備更新(480百万円)、用途変更(167百万円)、主な減少額は減価償却費(179百万円)である。
3. 期末の時価は、不動産鑑定士による鑑定評価に基づいたものである。ただし直近の評価時点から、一定の評価額や適切に市場価格を反映していると考えられる指標に重要な変動が生じていない場合には、当該評価額や指標を用いて調整した金額によっている。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社連結グループ会社は、経済的特徴の類似性、製品等の内容、販売市場や顧客、販売方法や規制環境等においてテレビ放送事業とラジオ放送事業の類似する一部を除き、各社大きく異なるため、個別に独立した意思決定を行い、業績評価および事業活動を展開している。

したがって当社グループは「放送事業部門」「ビル賃貸管理部門」「制作プロダクション部門」「情報処理部門」「通信販売部門」のセグメントから構成されており、この5つを報告セグメントとしている。

「放送事業部門」はラジオ及びテレビジョン放送とその関連事業、「ビル賃貸管理部門」はビル賃貸・管理、住宅の建設・販売、営繕、不動産仲介、「制作プロダクション部門」は記録映画、テレビ番組・CMの制作、ニュース取材、「情報処理部門」はソフトウェア開発、電子計算機・OA機器の販売、「通信販売部門」はテレビ、ラジオ利用の通信販売、音楽出版を行っている。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一である。なお報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であり、セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいている。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自平成25年4月1日至平成26年3月31日)

(単位 百万円)

	報告セグメント					合計	調整額 (注)1	連結財務諸表 計上額 (注)2
	放送事業 部門	ビル賃貸 管理部門	制作プロダク ション部門	情報処理 部門	通信販売 部門			
売上高								
(1) 外部顧客に対する売上高	16,186	1,398	106	3,737	128	21,554	-	21,554
(2) セグメント間の内部売上高 又は振替高	166	241	1,131	196	863	2,598	2,598	-
計	16,352	1,639	1,237	3,933	992	24,153	2,598	21,554
セグメント利益または損失()	827	200	10	66	2	972	0	972
セグメント資産	26,024	6,700	640	2,802	987	37,154	877	36,277
その他の項目								
減価償却費	877	157	35	62	5	1,136	-	1,136
有形固定資産及び無形固定資 産の増加額	712	2,898	18	335	0	3,963	-	3,963

(注)1 調整額は、以下のとおりである。

(1) セグメント利益または損失()の調整額 0百万円は、セグメント間取引消去である。

(2) セグメント資産の調整額 877百万円には、資本連結手続に係る消去額 412百万円、セグメント間取引消去等 465百万円が含まれている。

(注)2 .セグメント利益または損失()は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っている。

当連結会計年度(自平成26年4月1日至平成27年3月31日)

(単位 百万円)

	報告セグメント					合計	調整額 (注)1	連結財務諸表 計上額 (注)2
	放送事業 部門	ビル賃貸 管理部門	制作プロダク ション部門	情報処理 部門	通信販売 部門			
売上高								
(1) 外部顧客に対する売上高	16,697	1,486	120	1,375	103	19,781	-	19,781
(2) セグメント間の内部売上高 又は振替高	98	216	1,152	77	784	2,328	2,328	-
計	16,795	1,703	1,271	1,453	887	22,108	2,328	19,781
セグメント利益または損失()	1,067	129	17	191	11	1,010	0	1,010
セグメント資産	28,517	7,465	670	-	963	37,615	681	36,934
その他の項目								
減価償却費	797	201	49	27	5	1,078	-	1,078
有形固定資産及び無形固定資 産の増加額	800	847	34	67	0	1,749	-	1,749

(注)1 調整額は、以下のとおりである。

(1) セグメント利益または損失()の調整額 0百万円は、セグメント間取引消去である。

(2) セグメント資産の調整額 681百万円には、資本連結手続に係る消去額 312百万円、セグメント間取引消去等 369百万円が含まれている。

(注)2 .セグメント利益または損失()は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っている。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報 (単位 百万円)

	放送事業	情報処理 事業	その他	合計
外部顧客に対する売上高	14,980	3,737	2,837	21,554

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略している。

3. 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高(百万円)	関連するセグメント名
(株)電通	2,954	放送事業部門
(株)博報堂DYメディアパートナーズ	2,268	放送事業部門

当連結会計年度（自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報 (単位 百万円)

	放送事業	その他	合計
外部顧客に対する売上高	15,576	4,205	19,781

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略している。

3. 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高(百万円)	関連するセグメント名
(株)電通	3,034	放送事業部門
(株)博報堂DYメディアパートナーズ	2,421	放送事業部門

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はない。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はない。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はない。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の主要株主（法人の場合に限る）等

前連結会計年度（自平成25年4月1日 至平成26年3月31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合 (%)	関連当事者との関係		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の兼任等	事業上の関係				
その他の関係会社	日本テレビ放送網㈱	東京都港区	6,000	放送事業	(所有) 直接 0.0% (被所有) 直接 26.9%	兼任 1名	放送収入等	放送収入等	2,047	売掛金	578

当連結会計年度（自平成26年4月1日 至平成27年3月31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合 (%)	関連当事者との関係		取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
						役員の兼任等	事業上の関係				
その他の関係会社	日本テレビ放送網㈱	東京都港区	6,000	放送事業	(所有) 直接 0.0% (被所有) 直接 27.3%	兼任 1名	放送収入等	放送収入等	2,082	売掛金	577

(注) 1. 取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれている。

2. 取引条件及び取引条件の決定方針等
市場価格を参考に決定している。(イ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る）等
該当事項はない。(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引
該当事項はない。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
1株当たり純資産額	9,719,211円63銭	10,347,939円61銭
1株当たり当期純利益金額	235,536円92銭	214,518円82銭

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していない。

2. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は以下のとおりである。

	前連結会計年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	当連結会計年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)
当期純利益(百万円)	692	588
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る当期純利益(百万円)	692	588
期中平均株式数(千株)	3	3

(重要な後発事象)

該当事項はない。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

当社及び連結子会社は社債を発行していない。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金 (1年以内に返済予定の長期借入金)	939 (689)	289 (289)	0.85 (0.85)	- (-)
1年以内に返済予定のリース債務	193	24	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	2,695	2,906	0.88	平成28年4月～ 平成40年6月
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)	390	322	-	平成28年4月～ 平成41年12月
其他有利子負債	-	-	-	-
合計	4,217	3,541	-	-

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載している。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載していない。

3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりである。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	339	339	339	339
リース債務	24	24	24	24

【資産除去債務明細表】

該当事項はない。

(2) 【その他】

該当事項はない。

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	5,414	6,647
受取手形	232	244
売掛金	3 3,514	3 3,684
有価証券	3,812	2,848
番組勘定	32	19
商品及び製品	8	10
貯蔵品	2	4
前払費用	101	77
繰延税金資産	208	106
その他	81	63
貸倒引当金	0	0
流動資産合計	13,402	13,702
固定資産		
有形固定資産		
建物	1, 2 7,137	2 7,169
減価償却累計額	5,176	5,287
建物(純額)	1,960	1,882
構築物	2 1,949	2 1,951
減価償却累計額	1,384	1,382
構築物(純額)	565	569
機械及び装置	2 12,167	2 12,615
減価償却累計額	11,104	11,392
機械及び装置(純額)	1,063	1,222
車両運搬具	143	147
減価償却累計額	126	134
車両運搬具(純額)	17	12
工具、器具及び備品	1,082	1,107
減価償却累計額	871	926
工具、器具及び備品(純額)	211	181
土地	1, 2 1,644	2 1,640
建設仮勘定	13	15
有形固定資産合計	5,473	5,523
無形固定資産		
ソフトウェア	211	145
その他	2 18	2 18
無形固定資産合計	229	163

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	3,521	4,840
関係会社株式	2,642	2,934
役員及び従業員に対する長期貸付金	118	104
関係会社長期貸付金	352	330
破産更生債権等	29	23
長期前払費用	14	23
前払年金費用	633	891
その他	137	128
貸倒引当金	54	48
投資その他の資産合計	7,092	8,926
固定資産合計	12,794	14,611
資産合計	26,196	28,313
負債の部		
流動負債		
買掛金	3,616	3,631
短期借入金	1,450	-
未払金	3,459	3,442
未払代理店手数料	3,618	3,646
未払法人税等	28	270
未払消費税等	27	172
未払費用	259	277
前受金	66	56
預り金	43	41
設備関係支払手形	173	197
その他	0	1
流動負債合計	2,740	2,733
固定負債		
繰延税金負債	730	1,166
アナログ設備撤去引当金	102	79
退職給付引当金	6	6
役員退職慰労引当金	42	52
預り保証金	214	213
その他	19	19
固定負債合計	1,113	1,535
負債合計	3,852	4,267

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	750	750
利益剰余金		
利益準備金	188	188
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	34	35
別途積立金	17,200	17,200
繰越利益剰余金	2,912	3,965
利益剰余金合計	20,333	21,387
自己株式	465	550
株主資本合計	20,618	21,587
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	1,725	2,458
評価・換算差額等合計	1,725	2,458
純資産合計	22,343	24,046
負債純資産合計	26,196	28,313

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
売上高	1 15,098	1 15,568
売上原価	5 8,496	5 8,669
売上総利益	6,602	6,899
販売費及び一般管理費	1, 2 5,901	1, 2 5,922
営業利益	701	977
営業外収益		
受取利息	12	10
有価証券利息	14	14
受取配当金	1 121	1 128
デリバティブ評価益	8	-
雑収入	37	31
営業外収益合計	193	183
営業外費用		
支払利息	8	3
為替差損	2	-
雑損失	0	0
営業外費用合計	9	3
経常利益	885	1,158
特別利益		
固定資産売却益	3 9	3 25
投資有価証券売却益	64	5
関係会社株式売却益	-	653
国庫補助金	16	7
環境対策費戻入益	26	-
その他	-	4
特別利益合計	116	695
特別損失		
固定資産除売却損	4 25	4 28
固定資産圧縮損	15	7
役員退職慰労金	-	7
投資有価証券売却損	0	-
投資有価証券評価損	7	-
アナログ設備撤去引当金繰入額	50	-
その他	-	2
特別損失合計	96	44
税引前当期純利益	904	1,809
法人税、住民税及び事業税	43	292
法人税等調整額	244	312
法人税等合計	287	604
当期純利益	618	1,205

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	利益剰余金					自己株式	株主資本合計
		利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金合計		
			固定資産 圧縮積立 金	別途積立金	繰越利益 剰余金			
当期首残高	750	188	34	17,200	2,440	19,861	0	20,611
当期変動額								
税率変更による積立金の調整額			-		-	-		-
剰余金の配当					145	145		145
当期純利益					618	618		618
自己株式の取得							464	464
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	-	-	-	-	472	472	464	8
当期末残高	750	188	34	17,200	2,912	20,333	465	20,618

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有 価証券評 価差額金	評価・換 算差額等 合計	
当期首残高	1,324	1,324	21,934
当期変動額			
税率変更による積立金の調整額			-
剰余金の配当			145
当期純利益			618
自己株式の取得			464
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	401	401	401
当期変動額合計	401	401	409
当期末残高	1,725	1,725	22,343

当事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	利益剰余金					自己株式	株主資本合計
		利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金合計		
			固定資産 圧縮積立 金	別途積立金	繰越利益 剰余金			
当期首残高	750	188	34	17,200	2,912	20,333	465	20,618
当期変動額								
税率変更による積立金の調整額			2		2	-		-
剰余金の配当					150	150		150
当期純利益					1,205	1,205		1,205
自己株式の取得							85	85
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	2	-	1,053	1,054	85	969
当期末残高	750	188	35	17,200	3,695	21,387	550	21,587

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有 価証券評 価差額金	評価・換 算差額等 合計	
当期首残高	1,725	1,725	22,343
当期変動額			
税率変更による積立金の調整額			-
剰余金の配当			150
当期純利益			1,205
自己株式の取得			85
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	733	733	733
当期変動額合計	733	733	1,702
当期末残高	2,458	2,458	24,046

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(イ) 子会社株式

移動平均法に基づく原価法

(ロ) その他有価証券

時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

なお、組込デリバティブを区分して測定することができない複合金融商品は、全体を時価評価し、評価差額を当事業年度の損益に計上している。

時価のないもの

移動平均法に基づく原価法

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

(イ) 番組勘定

個別法に基づく原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(ロ) その他

先入先出法に基づく原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

3. 固定資産の減価償却の方法

(イ) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

ただし、平成10年4月1日以降取得した建物(建物附属設備は除く)については、定額法によっている。

なお、主な耐用年数は以下のとおりである。

建物及び構築物 2~50年

機械装置 2~22年

工具、器具及び備品 2~20年

車両運搬具 2~5年

(ロ) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

ただし、ソフトウェア(自社利用)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっている。

4. 引当金の計上基準

(イ) 貸倒引当金

売上債権等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し回収不能見込額を計上している。

(ロ) アナログ設備撤去引当金

アナログ設備の撤去及び除却に係る将来の支出に備えるため、発生が見込まれる額を計上している。

(ハ) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当期末において発生していると認められる額を計上している。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっている。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(12年)による定率法により按分した額を、それぞれ発生年度から費用処理している。

(ニ) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上している。

5. その他財務諸表作成のための重要な事項

(イ) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理している。

(ロ) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっている。

(貸借対照表関係)

1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりである。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
建物	216百万円	- 百万円
土地	6	-
計	222	-

担保付債務は、次のとおりである。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
短期借入金	50百万円	- 百万円
計	50	-

2 圧縮記帳の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
建物	42百万円	42百万円
構築物	219	218
機械及び装置	176	181
土地	828	828
施設利用権	2	2

3 関係会社項目

関係会社に対する金銭債権及び金銭債務は、次のとおりである。

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
短期金銭債権	735百万円	723百万円
短期金銭債務	651	597
長期金銭債権	52	30

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高に係るものは次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	3,434百万円	3,347百万円
営業費用	3,935	3,849
営業取引以外の取引高	57	63

2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度 65%、当事業年度 67%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度 35%、当事業年度 33%である。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日)	当事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)
代理店手数料	2,305百万円	2,372百万円
人件費	1,596	1,617
退職給付費用	123	84
役員退職慰労引当金繰入額	17	19
減価償却費	181	164

3 固定資産売却益の内容は次のとおりである。

前事業年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)		当事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)	
建物	- 百万円	建物	1百万円
構築物	4	構築物	4
機械及び装置	5	機械及び装置	2
土地	-	土地	19
計	9	計	25

4 固定資産除売却損の内容は次のとおりである。

前事業年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)		当事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)	
建物	- 百万円	建物	3百万円
構築物	1	構築物	7
機械及び装置	19	機械及び装置	3
工具及び器具	1	工具及び器具	0
その他	4	その他	15
計	25	計	28

5 売上原価の主要な費目及び金額は次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)	当事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)
人件費	1,286百万円	1,326百万円
退職給付費用	97	61
報道費	785	840
購入番組費	805	805
制作雑費	1,711	1,690
事業費	1,739	1,892
減価償却費	696	633

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 平成25年 4月 1日 至 平成26年 3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数(株)	当事業年度増加 株式数(株)	当事業年度減少 株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
普通株式	154	384	303	235
合計	154	384	303	235

- (注) 1. 自己株式の数の増加は、単元未満株式の買取り及び株式の併合に伴う端株の買取りによる増加である。
2. 自己株式の数の減少は、株式併合による減少である。

当事業年度(自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数(株)	当事業年度増加 株式数(株)	当事業年度減少 株式数(株)	当事業年度末 株式数(株)
普通株式	235	43	-	278
合計	235	43	-	278

- (注) 1. 自己株式の数の増加は、株式譲渡制限設定に伴う反対株主からの買取りによる増加である。

(有価証券関係)

子会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額 子会社株式814百万円、前事業年度の貸借対照表計上額 子会社株式855百万円)は、市場価額がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載していない。

(税効果関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金	251百万円	- 百万円
未払賞与	78	78
有価証券評価損	376	340
退職給付引当金	33	-
その他	140	132
繰延税金資産 小計	878	550
評価性引当額	446	399
繰延税金資産合計	432	152
繰延税金負債		
土地圧縮積立金	18	17
退職給付信託	196	178
前払年金費用	-	50
その他有価証券評価差額金	740	966
繰延税金負債合計	954	1,212
繰延税金資産の純額	522	1,060

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成26年3月31日)	当事業年度 (平成27年3月31日)
法定実効税率	37.7%	35.3%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.8%	0.9%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	3.0%	1.5%
住民税均等割	0.3%	0.2%
評価性引当額	7.4%	0.3%
税率変更による影響	-	0.7%
その他	1.3%	0.5%
税効果会計適用後の法人税の負担率	31.7%	33.4%

3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成27年法律第9号)及び「地方税法等の一部を改正する法律」(平成27年法律第2号)が平成27年3月31日に公布され、平成27年4月1日以降に開始する事業年度から法人税率等の引き下げ等が行われることになった。

これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の35.3%から、平成27年4月1日に開始する事業年度に解消が見込まれる一時差異については32.8%に、平成28年4月1日以降に開始する事業年度に解消が見込まれる一時差異については、32.0%になる。

この税率変更により、繰延税金資産の金額(繰延税金負債の金額を控除した金額)は113百万円増加し、法人税等調整額が12百万円減少、その他有価証券評価差額金が100百万円増加している。

(重要な後発事象)

該当事項はない。

【附属明細表】

【有価証券明細表】

【株 式】

銘柄		株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)	
投資 有価証券	その他 有価証券	KDDI(株)	352,200	958
		(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ	160,100	334
		(株)電通	64,400	332
		中京テレビ放送(株)	14,000	210
		日本電信電話(株)	13,920	103
		(株)ほくほくフィナンシャルグループ	341,000	91
		(株)ほくほくFグループ(第5種優先株)	100,000	50
		第一生命保険(株)	23,900	42
		札幌総合情報センター(株)	610	31
		(株)三井住友フィナンシャルグループ	6,926	32
		(株)パップ	60,000	30
		(株)WOWOW	11,000	42
		(株)日専連ニッックコーポレーション	200	15
		北海道電力(株)	15,668	15
		(株)さっぽろテレビ塔	10,000	10
その他(9銘柄)	39,885	14		
計		1,213,809	2,308	

【債 券】

銘柄		券面総額(百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)	
投資 有価証券	その他 有価証券	日本生命2012基金債	200	203
		東芝第57回無担保社債	200	202
		日本生命2011基金債	100	102
		明治安田生命2012基金債	100	101
		明治安田生命2014基金債	200	201
		大和証券グループ本社債	200	204
計		1,000	1,013	

【その他】

		種類及び銘柄	投資口数等(口)	貸借対照表計上額 (百万円)
有価証券	その他 有価証券	野村金銭信託レジスタ	2,400,000,000	2,400
		ダイワマネーマネジメントファンド	447,856,407	448
		小計	2,847,856,407	2,848
投資 有価証券	その他 有価証券	(投資信託)		
		上場インデックスファンド日本高配当	78,120	131
		D L I B J 公社債オープン短期コース	101,091,792	101
		D L I B J 公社債オープン中期コース	99,000,099	101
		ニッセイ日本インカムJボンド年1回決算	98,444,080	100
		日本物価連動国債ファンド	95,145,574	100
		インデックスファンド225	244,521,878	129
		ダイワ日本国債ファンド(毎月分配)	96,811,371	99
		ゴールドマン・サックス世界債券オープン	92,528,563	99
		野村日本株高配当70連動型上場投信	4,413	100
		上場インデックスJREIT	54,300	102
		(不動産投資信託受益証券)		
		ジャパンリアルエステイト投資証券	160	90
		日本リテールファンド投資証券	223	53
		日本プライムリアルティ投資証券	85	35
		トップリート投資証券	45	22
		日本ロジスティクスファンド投資証券	85	21
		フロンティア不動産投資証券	30	17
		福岡リート投資証券	60	13
		森トラスト総合リート投資証券	50	12
		(優先出資証券)		
		信金中央金庫	800	191
			小計	827,681,728
	計	3,675,538,135	4,367	

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産						
建物	1,960	62	5	135	1,882	5,287
構築物	565	79	9	66	569	1,382
機械及び装置	1,063	578	4	415	1,222	11,392
車両運搬具	17	3	-	8	12	134
工具、器具及び備品	211	32	0	62	181	926
土地	1,644	-	3	-	1,640	-
建設仮勘定	13	820	818	-	15	-
計	5,473	1,574	839	685	5,523	19,122
無形固定資産						
ソフトウェア	211	44	-	110	145	-
その他	18	-	-	0	18	-
計	229	44	-	110	163	-

(注) 当期増加額のうち主なもの
 機械及び装置 テレビスタジオ照明設備更新 162百万円
 手稲D T V 2台化工事 88百万円
 釧路ラジオ送信所移転更新 60百万円

【引当金明細表】

(単位：百万円)

区分	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	54	0	6	48
アナログ設備撤去引当金	102	-	23	79
退職給付引当金	6	1	1	6
役員退職慰労引当金	42	19	9	52

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

(3) 【その他】

該当事項はない。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
株式の名義書換え	
取扱場所	東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
株主名簿管理人	東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
取次所	みずほ信託銀行株式会社 全国各支店 みずほ証券株式会社 本店及び全国各支店
名義書換手数料	該当事項なし
新券交付手数料	1株につき300円
公告掲載方法	官報
株主に対する特典	該当事項なし

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は上場会社でないため、金融商品取引法第24条の7第1項の適用はない。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出している。

- (1) 有価証券報告書及びその添付書類 平成26年6月27日 北海道財務局長に提出
事業年度（第73期）（自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日）
- (2) 半期報告書 平成26年12月25日 北海道財務局長に提出
（第74期中）（自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日）
- (3) 臨時報告書
平成26年9月22日 北海道財務局長に提出
金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号（特定子会社の異動）に基づく
臨時報告書である。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はない。

独立監査人の監査報告書

平成27年6月25日

札幌テレビ放送株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 佐野 裕 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 田辺 拓央 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている札幌テレビ放送株式会社の平成26年4月1日から平成27年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、札幌テレビ放送株式会社及び連結子会社の平成27年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成27年6月25日

札幌テレビ放送株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 佐野 裕 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 田辺 拓央 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている札幌テレビ放送株式会社の平成26年4月1日から平成27年3月31日までの第74期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、札幌テレビ放送株式会社の平成27年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。